

菌類の生きざまを理解し、 菌類を利用する

自然の中で菌類はしたたかに生きています。
菌類が植物や動物とどのような
関わりを持って暮らしているのか、
またその菌類を人間はどのように利用するのか、
菌類がつなぐ生物の不思議な世界を
のぞいてみましょう。



鳥取大学グローバルCOEプログラム
「持続性社会構築に向けた菌類きのこ資源活用」公開シンポジウム

菌類のふしぎと 他の生物との関わり合い



2012. **3/4日** 13:00-16:00 (12:30開場)

場所: 大阪市立自然史博物館 1F講堂 ※博物館入館料のみ必要

どなたでも参加いただけますが、参加ご希望の方はできるだけ事前にe-mailまたはFAXにて、お名前、ご住所、お電話番号、e-mailアドレスを記載のうえお申込ください。当日参加も受け付けます。

〈申込先〉鳥取大学農学部連大総務係「公開シンポジウム参加申込」
e-mail: ag-rensou@adm.tottori-u.ac.jp FAX: 0857-31-5683

プログラム

- 12:30- 開 場
- 13:10-13:35 クロマツと一緒に生活するきのこ「ショウロ」の栽培きのこ栽培の悩みの解決を目指す!
- 13:35-14:00 「分解者」としてのきのこは「生産者」になれるのか?
- 14:00-14:25 休 憩
- 14:25-14:40 休 憩
- 14:40-15:05 光合成をしない植物(菌従属栄養植物)の菌根共生
- 15:05-15:30 昆虫に栽培される菌類の生態
- 15:30-15:55 里山の生態系変化の中での菌類



主催: 鳥取大学グローバルCOEプログラム
「持続性社会構築に向けた菌類きのこ資源活用」

共催: 日本菌学会 後援: 大阪市立自然史博物館

シンポジウムに関する
お問い合わせ・お申込み

鳥取大学農学部連大総務係

〒680-8553鳥取市湖山町南4-101
TEL: 0857-31-5445 FAX: 0857-31-5683 e-mail: ag-rensou@adm.tottori-u.ac.jp

会場に関するお問い合わせ

大阪市立自然史博物館

〒546-0034大阪市東住吉区長居公園1-23
TEL: 06-6697-6221 FAX: 06-6697-6225 URL: http://www.mus-nh.city.osaka.jp/

アクセス: 地下鉄御堂筋線「長居」駅 南改札口3号出口から東へ約800m、JR阪和線「長居」駅東出口から東へ約1km



前川 二太郎

(まえかわ にたるう)

鳥取大学グローバルCOEプログラム
「持続性社会構築に向けた
菌類きのこ資源活用」拠点リーダー
鳥取大学大学院連合農学研究所長
教授

「きのこ・かび・酵母」として親しまれている菌類は、私たちが生活しているごく身近なところにいます。しかし、「菌類は自然の中でどのような生活をしているのか」、「私たちにとって役立つようなことがあるのか」、また「役立つためにどのような工夫がなされているのか」などについては案外知られていません。このシンポジウムでは、最新の研究成果を織り交ぜながら、このような疑問にわかりやすくお答えします。

講演内容紹介



霜村 典宏

(しもむら のりひろ)

鳥取大学大学院連合農学研究所・
農学部附属菌類きのこ遺伝資源
研究センター
准教授

クロマツと一緒に生活するきのこ「ショウロ」の栽培

ショウロとは、マツタケと同じように、マツと一緒に生活している食用きのこです。このきのこはクロマツ林が健全に育っていた時代には、いたるところのクロマツ林で大量に発生していましたが、今では発生量が減少し、希少なきのことなっています。ここでは、この希少なきのこの人工栽培への試みについて紹介します。



松本 晃幸

(まつもと てるゆき)

鳥取大学大学院連合農学研究所・
農学部附属菌類きのこ遺伝資源
研究センター
教授

きのこ栽培の悩みの解決を目指す!

「よいものをたくさん作る」ために、きのこ栽培では技術や品種の開発に力を入れてきましたが、実は生産現場で働いている人たちの健康を害するほどの深刻な問題が古くから発生していることについては、ほとんど知られていません。その問題とは、きのこから飛散する胞子を吸引して発病する「アレルギー性肺炎患」です。私たちは、この問題の解決に繋がる「胞子を作らないきのこ」の研究を続けています。



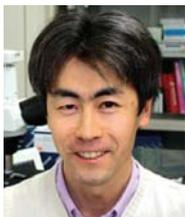
會見 忠則

(あいみ ただし)

鳥取大学大学院連合農学研究所・
農学部附属菌類きのこ遺伝資源
研究センター センター長
教授

「分解者」としてのきのこは「生産者」になれるのか?

きのこは、落ち葉や枯れた木などに含まれる複雑な化学構造をもつ物質を、分解して自分自身の栄養にする能力が非常に高いため、自然界では「分解者」と呼ばれています。きのこの「分解者」としての能力に、アルコールなどの有用物質を生産する能力を付加することができれば、廃棄物を工業原料に変えることができ、地球の温暖化防止などに貢献できます。遺伝子工学的に、きのこを「生産者」に変身させる試みを紹介します。



大和 政秀

(やまと まさひで)

鳥取大学農学部附属
菌類きのこ遺伝資源研究センター
助教

光合成をしない植物(菌従属栄養植物)の菌根共生

多くの植物は、根の部分で菌類と共生しており、この関係は菌根と呼ばれています。植物の中にはこの菌類(菌根菌)からエネルギー源をもらうことによって、光合成する能力をもたない種(菌従属栄養植物)が存在します。菌従属栄養植物は、菌類に「寄生している」といえるかもしれませんが、このような植物には希少な種が多いので、菌根菌の種類を明らかにすることが種を保全する取り組みに役立ちます。ここではそのような取り組みに向けた研究例を紹介します。



梶村 恒

(かじむら ひさし)

名古屋大学大学院生命農学研究科・
農学部生物環境科学科
准教授

昆虫に栽培される菌類の生態

菌類の中には、胞子の分散を昆虫に頼っているものがあります。特殊化が進むと、胞子は専用の器官で運ばれ、昆虫の食物として育てられるという、究極状態に至ります。このような相利的な(もちつ、もたれつ)関係について、昆虫がつくりあげた巧妙な栽培の仕組みや、その起源を紹介します。菌類と甲虫を中心に、ハチやハエなども含めて、様々な共生関係を例に挙げながら、昆虫の武器として、植物病原菌が運ばれている点についても言及します。



佐久間 大輔

(さくま だいすけ)

大阪市立自然史博物館
主任学芸員

里山の生態系変化の中での菌類

戦後、村の生活が変わり周囲の山の利用は変わりました。さらに、都市の、例えば大阪の燃料事情の変化は、広く西日本の里山に影響しています。「松枯れ」や最近の「ナラ枯れ」にもつながっています。森林の変化は、菌類の種類や量にも大きな影響を与えています。地表にたまる腐植や倒木、共生する樹木の増減など様々なことが関係しています。菌類のレッドデータブックや、野生きのこの採集、毒きのこの中毒対策などに関係していきます。

